

影繪女人

舟橋聖一

中央公論社



影繪女人

©一九六四

昭和三十九年一月二十日初版印刷
昭和三十九年一月三十日初版發行

著者 舟橋聖一

装幀者 高山辰雄

發行者 宮本信太郎

印刷者 高橋武夫

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(調)五九二一

振替東京三四

定価 六五〇円

影繪女人

一章

わたしが今住んでいる家は、妻葦子の父が中年のころ、買った家である。結婚後、わたしは、岳父の魅力に惹きつけられたが、とうとう彼と共に住むようになって、実父の憎しみを買うに至った。

岳父の前歴はあと回しにして、先ず彼が、植木や庭石にくわしくて、庭いじりの趣味があり、植木屋泣かせであったことを叙べよう。

彼の自慢は、苔の庭だ。

居間と客間が二間つづきになっている別棟の離れの日の当たらない北向きの庭が、それである。隅に算があつて、京都一乗寺町の詩仙堂にある鹿おどしを真似た添水すすぎの音が、丁度いい間を

おいて

カタン

カタン

と鳴ったりする。

苔というものが、こんなにも人の心をおちつかせるものとは、わたしも岳父の家に住むようになって、はじめてわかった。然

し、その後岳父に聞いたところでは、南側の庭は、灯籠でも庭樹でも、殆んど自分が取換えてしまつたが、北向きの苔庭だけは、買った家の前の持主が丹精したものを、旧態のまま保存したので、この通り時代がついて見えるのだと。その美事に、庭いじりの好きな岳父も、さすがに手をつけるのを憚つたのか、それとも、その苔庭に魅せられて、家を買つたのか。そのどちらでもあるだろう。

南の庭には、石井戸がある。

これも、昔の持主が掘つた井戸だそうだ。井戸はなるべくソツとしておくほうがいいと云う人があつて、岳父も苔と井戸だけは、いじらなかつたものらしい。六十尺はあると云う話だったが、水道屋に実測させたら、三十七、八尺しかない。それでも、水は澄んでいて、水質もよく、飲料に適している。

岳父は朝起きると朝飯前に一時間ほど、夕方は夕飯前に十分ほど、必ず庭へ下り、夏なら水屋さんという白キャラコの、今ならアロハの網入りのようなのを着、冬なら、紺の絆天に、腹掛股引といういで立ち——それにこの頃また海岸などで流行

しているクーリー・ハットをかぶって、植木鋏を手に、

チヨキ チヨキ

と、枯れ葉枯れ枝を剪るのを日課としている。少々雨なら、簑笠をかぶるか、長い雨合羽を着こんでも、その日課を怠らな。愛用の植木鋏は、いかにもよく剪れそうで、

「さぬき」

と銘がうつてあった。

「何しろ、物好きなんですからね。哲也さんも段々に、びつくりなさいますよ」

その頃はまだ達者だった葦子の母がそう云った。

「つまりそれが健康法でしょう」

「でも、土いじりは、破傷風がこわいんですよ……あれが爪の間からでもはいたら、百年目ですもの」

「まさか——」

「いいえ、破傷風菌は土の中にいるんですから……口があげなくなつて、狼みたいな顔になつて死ぬそうですから」

「それは、恐ろしい」

「哲也さんは、御存じなかったんですか」

「妙な顔になるとは聞きました……」

「だから氣をつけて下さいって申上っているのに、鼻緒ずれのまんま、跣足になつたり……とても乱暴なの」

こんどは葦子が非難した。正直、家族の者は、岳父の庭いじりを、あまり歓迎する風ではなかった。

庭へ下りる岳父は短い半股引の下に、まるい太腿をあらわしていたが、いかにも光沢があつて、栄養がよく、相撲取か水泳選手の太腿のように、毛の生えていないつるつるの膚であつた。そこへいくと、実父の体格は、骨張つていて、胸にも脛にも、黒い毛がモジャモジャ生えているのである。

ところで、この辺にも、空襲はあつたのだが、ほんの一片たまりの地域が焼けなかったので、東北へ疎開した岳父にとつては、儲けものだった。焼夷弾一つ落ちなかったたので、美事な苔が、そっくり戦後に残つたのである。

苔ばかりでなく、石はむろん、植木も大体残つたが、岳父が一番我慢した老梅が一本、枯れた。この梅が盛りの頃には、数えて二百輪以上の蕾をつけたそうで、花は咲いても、実の成らぬ梅もあるが、この樹はよく実が成り、梅干に漬けて、毎年二樽は出来た。三月の半ばには、その下に緋毛氈を敷いて、梅見の宴をひらくのが、松中家の吉例であつた。その梅が段々に衰えて、二百輪が百輪になつたとき、葦子は父か母の寿命に関係があるのではないかと思つた。

その百輪がまた減つて、七十輪、六十輪となつた。戦争中や空襲中は、人間の栄養が衰えたほどだから、梅樹の栄養にまで手が廻らなかつたのだろう。

「これが昔通り、二百輪も花をつけるのだつたら、空襲下でも、わしは梅見をやるんだが……」

と岳父は、花のない老梅の枝を眺めては、怨ずるように云つたという。

庭師の島亀が、出来る限り手当をしたが、もうダメだった。

枯れるものを支える努力はもうなかった。いよいよ最後の頃には、一枝に二輪乃至三輪で、全部数えて八輪しか咲かなかった。それでも岳父は、この老梅を切る気はなかった。一輪も咲かない梅樹が二年ほど、そこに植わったままだった。結局、切ったのは、わたしが引きうけてからのことであつた。

岳父の話だと、この家を買った四十年前には、この近所は一帯の麦畑で、山の手線の駅まで行く五分弱の近道に、人家はほんの二軒か三軒であつた。

普請は贅沢なものではないが、間ちがいのない木口が使つてあつた。当時は水道が引けないので、自家製の大きなタンクを屋根に近く据えつけて、そこから台所や浴場へパイプが引いてあつたと云う。

岳父が本気で庭いじりをはじめたのは、五十歳をすぎ、葦子が生れて、十年ほどしてからであつたというから、その前の持主のつくった庭も、彼女はごく臆ろにはおぼえていて、井戸もはじめは、井桁に組んだ木の井戸だったのを、岳父が石でたたみ直したような。

そういう修正も、一度にやつたのではなくて、二年も三年もかかってやつた。岳父は機の熟するのを待ち、庭師の島亀を相手に、段々に庭を變形させていったのである。

「それじゃ大変なお金がかかってしまったわけだな」

「そうなのよ。どうして、そんなことに、むやみとお金を使うのか、あたしにはわからなかった。島亀が、父をそそのかし

て、有金のこらず、石や植木に換えてしまふのかしらと思つて……わたし、島亀を憎らしい奴と思つたこともあるわ」

と、葦子は語つた。

島亀が、どこで搜してきたのか南側の庭の中央にある枝ぶりのいい松を運んだのが、岳父の贅沢の頂点の頃で、このときはもう、葦子は十六、七になつていた。

「梅と松とは、どっちが先だったの」

「それは梅……梅はあたしが小学校のときからありました。松はずつとあとよ。その間が十年位あるんじゃない」

「それじゃ十年越しの庭いじりじゃないか」

「松までいれるとね……新しい植木や石がはいると、父はとも昇奮するらしくって、夜中に、寢床がカラッポのことがあつて、母とあたしが搜したら、寒い晩なのに、庭へ下りて、一人でその松を眺めているの……」

「冬……」

「秋だつたと思うわ。どうしたのって、背中を叩いて上げたら、無念無想だつたンだつて、叱られたわ……月が松の葉越しに、どうかかるかが見たかつたらしいのね……」

そんな話を聞くと、わたしは自分の不風流がしみじみこたえた。春秋の月が、どこから出て、どこへ沈むかも、たしかめて見たことはない。

「そんなに庭の樹を愛していたのに、梅が枯れたときは、さぞ淋しかったろうな」

「とても——」

岳父の話となると、熱のはいる葦子だが、わたしもそれに負けなかった。

○

実父は金沢の産。古く云えば、前田家の藩儒の末孫だ。維新以来、禄にはなれて、貧窮に喘いだが、藩政時代からの古い家屋だけは残っていた。大正のはじめにそれを人に貸して、東京へ出て、官吏となり、借家住いをしたが、長男のわたしが思うようにいかないことから、金沢の家は三番目の弟がもらって、戦争中疎開したまま、今では借家人に出てもらって、自分が家族と共に住んでいる。二番目の弟は金沢の大きな商店の養子になって、一番恵まれた暮らしをしていた。

この金沢の旧家も、浅野川の近くで、はじめは曾祖父が町屋敷として藩から拝領したものを、二つに割って、一方を手ばなしたものだそう。わたしは、戦争前に二、三度行ったことがあるだけで、戦後敬三郎が住むようになってからは、金沢に用事があって出かけても、「つば甚」とか、「白雲楼」とかに泊ることが多く、ついで自分の家には靴をぬいだことがない。

然し、時代がかかっていることは、岳父の家や庭の比ではないので、その薄暗い書院で、凝っと思いをこらしている昔の実父を想像すると、いつか藩政時代の匂いが、そのまわりを漂いはじめ、昭和の世相のはげしい移り変りを忘れてしまいうようになる。

むろん、庭は一面苔むしている。

が、岳父の家の苔庭とは、趣きがちがって、金沢の家のは、ごく自然に土着し、発生した苔のむしろである。ところが、岳父の家の苔は、人工によって、丹精してつくり上げたものであるから、みごとという点では、やはり上だろう。が、苔の話になると岳父は、

「一度、金沢のお屋敷の苔を拝見したいものだな」と度々云った。そこにはありあり、男というものがもって生れた競争心のようなものもかくされていた。

町人の出の岳父と、士族から官吏に転じた実父とは、ソリのあう筈がない。それは庭に対する考え方にも、たちまちにしてあらわれるわけで、一口に云うと、岳父は技巧を愛し、実父は自然を尚しとした。

子供の頃から、わたしが芝居や小説が好きだったのを、実父はそれを不自然なものとして忌みきらった。母は富山生れの、同じ官吏の娘であった。それでよく云った。

「哲也も勉強して高文を取ったら、農林省なら、お父さんがいらっしやるから、入れていただくのだね」

と。実父がはじめて、上京して、試験にパスして採用されたのは、その前身の農商務省であったが、それが二つにわかれて、農林省と商工省になったとき、父は前者に配属されたのである。

然しわたしは両親の意思を無視して、ほんとうは文学をやりたい。出来れば小説の一つも書きたかったが、そこへ踏み切れなかった。それで、平凡に民間の銀行員となった。が、機会に恵まれたら、いつでも銀行を辞める覚悟はついていた。

——その前に、わたしがひどく身体が弱くて、廃嫡されかけた話をしなければならぬ。中学を出るまでは、一年の大半、病気をしているほうが多い位で、みんなから、

びいどろ徳利

という諱名をもらった。そのうちに、誰云うとなく、諸越さんの家では、総領は廃嫡で、次男は金沢だから、結局三男が相続人になるという噂が立ち、それがわたしの耳にも、ふと入ってきた。

廃嫡などと云う言葉は、当節では民法が變つて、まったくナシセンスになつてしまつたが、戦争前までは、不快な響きを持つていたのである。長男に生れながら、廃嫡になるようでは、よっぽどの出来損いか、或はお話にならないほどの不健康、若しくは何かとんでもない不名誉をやつてのけた場合であつて、普通のことでは、長幼の序をひっくり返すことはゆるされていなかった。

それどころか、加賀百万石の時代には、不都合あつて父が子を斬り、兄が弟を殺す場合は、仇討申請の許可は出なかった。

いや、都合不都合にかかわらず、父が子を討ち、兄が弟を殺しても、斬捨御免であつて、何んの罰則もなかった。そのくらい、父兄は絶対的な権力の座を与えられていたのであるが、時代の推移と共に、その権力は削減を受け、現代の新民法では、兄も弟もあつたものではない。

「お兄さん……旦那はあなたを廃嫡なさるそうだ」

と知らせてくれたのは、やはり金沢から来ている実父の手下

の事務官の武部であつた。

「そうかい」

「あなたは、そうかい、なんて云つて、すましているが、これは由々しいこつちや」

「僕を廃嫡して、誰が跡取りになるの」

「敬三郎さんだ云います」

「それなら、うすうす、感付いていたさ」

「それで平氣とは、あなた、みんなに弱虫云われるが、どうして一ぱしの豪傑や」

武部は磊落に笑つた。が、實際は豪傑どころの騒ぎじゃない。わたしが廃嫡された場合、どこへ行きどころがないのだから、そうなつたら、一生、敬三郎に、面倒を見てもらわねばならない。

その頃の実父の顔を思ひうかべると、たしかにわたしより、敬三郎のほうを信愛していたようだ。敬三郎は、病氣らしい病氣をしたことがない。わたしが百日咳のあとをこじらして、小児喘息でビイビイしている間、敬三郎は背も高くのび、身体全体のポリウムも、わたしを追い抜いていた。声も太かった。将来、社会的にも、敬三郎はわたしを凌いで、優越するに違いないと思う風だった。実父がそのように、法律上保護されている長幼の序を逆転させたいと考えるからは、廃嫡の手段あるのみであつたらう。

たしかに実父には、医者が匙を投げそうなわたしを廃嫡して、敬三郎に跡を取らせたかったにちがいない。それが、あとあと

まで尾を引いて、戦争で疎開したついでに、金沢の家を敬三郎に住まわせることにしたのである。

実父の考えに魔嫡案が、日の目を見ないうちに、わたしは旧制高校から大学へはいつて、段々に生きる自信を持ち出した。身体も先ず先ず、十人並のところへ達した。病気はするが、悪性のものではないことも、わかつてきた。もつとも、スポーツにかけては、母が、

「敬は運動神経が強い」

とよく云った通りで、わたしは彼に遠く及ばなかったが、敬三郎は私大の試験にも通らずに、長い浪人生活の苦盃を嘗めた。その頃から、魔嫡案は影をひそめていったのである。

母がわたしに、農林省入りをすすめたのは、前にも書いた通りだが、それは実父の考えを、母が代弁していたのかもしれない。実父は、わたしが大学へ入った時、自分の構想した魔嫡案を自分で取消し、わたしを少壮気鋭の農林官僚に仕立てることに、夢をかえたのではないか。

たしかに、農林省なら、実父自身の歩いたコースであり、わたしをどのようにも歩かせることが出来たろう。実父の同僚たちが、それを実父にすすめたかも知れぬ。然し、士族の習慣からぬけ出せぬ実父は、瘦我慢をモットウとしていたので、子供に農林省入りを暗示したりは出来なかった。それで何んとなく母を以て云わしめたのだらう。然し、わたしはわたしなりの反骨があった。いつまでも、武家は町人よりも偉く、官は民より尊しとしている実父の頭なの精神が、わたしには鼻もちがなら

なかった。

そんなわけで、わたしと葦子との交際も、実父には最後まで隠しておいた。然し、母のほうは、うすうす気付いていたから、何事も実父には報告する母が、それだけを黙っている筈もない。然し実父は、結納の話になるまで、どこ吹く風と云う素振りであつた。

結婚前後の葦子は、わたしがこう書くとおかしいが、縁談は降るようであつた。岳父がまた、娘の纏緞自慢で、それを平気で喋るものだから、こちら側の親類は、あまりゾツとしなかつたようだ。

ことに実父は、自慢が大きらいで、紳士の嗜みは、やたらに自慢しないことだと決めていた。第三者のことはほめても、息子や娘やその他家族一門を、ほめて云うことは、最大の恥とした。女房は愚妻で、息子は豚児である。敬三郎のことをほめるといつても、それは内輪だけのことで、世間に対しては、あくまで控え目に云う。

それなのに、岳父のほうは、自分の娘を、学校は優等で、踊りは名取、ピアノの免状は持っているし、当時の華族様からも口がかったという風に、手放して自慢するのを、実父が苦虫をつぶしたような顔で、聞いていた光景を思い出す。

然しわたしには、娘自慢でも何んでもする正直な岳父のほうに、瘦我慢の実父よりも、人間的価値があると信じずにはいられなかつた。

岳父の前歴は、本所石原町の昆布問屋の二男であった。東京で、一、二と云われた大きな問屋で、岳父は父と兄の下で、律義に働き、学校は私大の夜学に通って、卒業し、屋間部に移って、中退した。問屋筋を二、三ヵ処渡って歩いたあと、芝金杉で、ゴムの問屋を開業して成功し、合名会社藤松組の専務にのし上った。その間、新橋、柳橋、芝神明などで、ずい分道楽をした。

実父も若い頃は、金沢の廓へ出入したことがあるそうで、酔うと小甚という若い妓に送られて帰ってきたが、どこまでも酒席のつきあい、それ以上深くなるところへはいかなかった――。実父の性格からすると、水商売の女は、男をたらしすために存在する女狐のようなものだといふ先入観から、まぬかれなかった。然し、小甚のほうは、実父の木で鼻をくくるような態度が気に入ったのか、えらく首つ丈で、若い妓には無理な心中立もした。実父が金沢をふり切って、東京へ立つときは、小甚が青い顔をして、浅野川にはまって死ぬと云って、騒いだという挿話があった。然し実父はそんなことに耳を藉す人ではなかった。

東京へ来てからも、小甚が一、二度追っかけて上京したことがあったそうだが、実父は取合わなかった。小甚は廓から足を洗って、実父と夫婦になるつもりだったのかも知れぬ。そのうちに、小甚もあきらめたのだろう。要するに、実父は女にむごいほうだし、岳父は女には親切者だった。それで実父は岳父を

評して、

「松中さんは、よく云えば幫間、悪く云うと、妓夫太郎のようなところがある」

と、母に洩したことがあるそうだ。母がそれで、

「妓夫太郎は気の毒だわ」

と訂正した。岳父はわたしの母に対しても、下へもおかぬ。

庭へ出るときも、母の草履を手で揃えたり、床几に腰かけようとすると、

「ああ、鳥渡お待ち下さい」

と云って、ハンケチでそこを拭くといった塩梅であった。実父はそれを見て見ない振りをしてながら、やはり、苦い気分になり、

「幫間め」

と、心の中で蔑んでいたにちがいない。実父の考えによれば、女性はいくまで男性に奉仕すべきもので、その逆は成り立たないのであった。ところが岳父は、娘の葦子にさえ、重たいものは持たせない風であった。実父が縦のものを横にもせず、人の妻たるは、箕箒を執ること――箕とはチリトリ、箒はホウキ。つまり、チリトリやホウキを持って、汲々として労働奉仕するのが、妻の謙称である。そういう儒学好みの信条を絶対に変更しなかったのに対して、岳父の考えは、女性尊重論であった。どちらに与するや、と訊かれたら、わたしは文句なしに、岳父党に票を入れざるを得ない。

実父が母を伴って、松中里丈郎を訪問したとき、岳父はご自

慢の苔庭に、竹の皮で編んだ床几を並べ、葦子に野点^{やてん}の茶を点てさせた。岳父とすれば、それがひじょうな奢侈を意味したが、自然派の実父にしても、茶道だけは、金沢を本場だと自負しているのです、すべてが子供じみて見えたらしい。

ことに、どうしたのか、葦子が堅くなって、切柄杓をまちがえ、手もとが狂って、苔の上へ落とすという不手際を演じたので、実父は、ありありと不興を顔に見せてしまったものだ。

「お菓子も、有り合せで……やはり先生は、森八でないと、いけませんでしような」

と岳父が云った。

苔の庭には、実父は一向におどろかなかった。金沢の武家屋敷には、この程度の苔庭は、いくらもあった。少し時代のたっている邸なら、もっと見ごとな苔庭がある。こんなところで満足しているようでは、いいものを沢山見ていないのだと、実父は岳父を見くだした。

そのくせ実父は、借家住いのせいか、自分の家の庭には無関心だった。柿が一本、植えてあるきりだ。春は柿若葉が美しく、秋になると、枝もたわむほど朱い実が成る。それだけだった。隣の犬が、棒切れをくわえこもうと、それを片付けると云うでもない。だから、実父は自分の家へ、まだ岳父を招いたことは一度もなかった。それほど、実父は負け惜しみが強かった。敢て人に下るまいとした。

「男の一生は、我慢だ」

とも、

「男はすぐ、泣いたり笑ったりするな。その我慢が出来て、はじめて一人前だ」

とも云った。暑い寒いも、容易には云わなかった。

○

さて、わたしの結婚であるが、披露宴は上野精養軒と決まり、その日があと一週間に迫ったとき、母がわたしに、

「お父さんは急に金沢に御用が出来て、お役所からお立ちになった。多分、式には間に合うようにお帰りになるでしょう」

と知らせた。わたしはそのとき、実父がわたしたちの結婚を避けて、金沢へ逃げたと思った。正直、実父はこの結婚を認めてはいなかった。最初から気のり薄だった。然し、話がトントン運んでいるので、実父は事後承諾を求められたにすぎなかったのだ。

それでもはじめは、

「農林大臣にでも来てもらって、来賓祝辞を述べて戴くか」

などと云ったが、それも沙汰止みで、実父は段々に無関心を示し出した。

月下氷人については、三人ほど候補者があった。一人は農商務時代の先輩である高梨子爵。今一人は大阪の昆布問屋の元締である島村商店の主人。第三はわたしの勤めている銀行の本店の代表頭取の有森さん。結果は、有森さんにしてもらうことになった。その点でも、実父はわたしの結婚に、気がぬけてしまったのだらう。

その前夜、はたして金沢から、電報がとどいた。

「ツゴ ウツカヌ○アスノシキニマニアワヌ○ミナニアシカラ

ズ ○ハルカニテツヤノジ シセイシユツバ ツヲイワウ」

とあった。

「何を云ってやアがるんだ」

わたしは辞色を荒らげた。母はおどろいて、

「まア……哲也」

「はじめっから、わかっていたんだ」

「そんなことはない。向うで、御用繁多で、どうしても都合がつかなくなったンじゃありませんか。この電報に、お父さんの真心のこもっているのがわからないの」

「真心なんて……親父は、大体、僕がきらいなんだ」

「きらいも好きも……わが子ですよ」

「敬三郎のことだと、目を細くする。僕のこととは氣にくわな。わかっていますとも……それにしても、一生一度の結婚式に、親父が出ないなんて、バカにするのも程がある」

「お役人つてものは、自分の勝手にならないンですよ」

「それと、こんどのこととは違います。親父は、僕がきらいなだけでなく、松中里丈も好きじゃない。またその娘の葦子もいやなんだ。そうにきまつてる」

「まア……」

それから母は泣き出した。

「いつかの野点のときだつてそうだ。一言でも二言でも、苦がみごとだとか、お薄がうまいとか、お世辞にだつて、賞められ

るじゃないか。ああいう強情我慢が男のモラルだと思っていや

アがる……お母さん、親父が欠席するンだつたら、諸親家側の親類は全部欠席したらどうですか。むろん、お母さんも升二郎も敬三郎も……みんな……」

「そんなことが今更ら出来ますか」

母はたった今、有森さんの応接間で、岳父と、席次札を並べ、全テーブルの配列をきめて帰ったところだった。

「それでは、これからもう一度、金沢へ電報打つて、お父さんに帰ってきて戴こう」

母は泣き泣き云った。

「その必要はない。また、電報の一つや二つで、心の変る親父じゃない。ずっと前から、こんどの式には出ない腹なンだから……親父つてのはそういう奴なんだ。親父がよく云つてるでしょう。女房なんてのは、箕帚で、チリトリとホウキにすぎない。お母さんだつて、実は親父のチリトリなんだ。ところが、こんど来る嫁は、お実家風を吹かしはしないか。お実家自慢をしやアしないか。哲也が女房の父親に、頭を下げやアしないかってね……」

「哲也がそう思うから、お父さんも氣まずくなるンじゃないの」

「要するに僕が悪いが、親父が悪いが知らないが、明日の式に欠席するというのが、一番端的に、親父の度根性をあらわしてる」

わたしは口を極めて云わずにはいらなかった。

その晩、母はわたくしにかくれて、実父の定宿の「つば甚」へ電話したらしい。然し実父は不在だった。それで子供の事務官に、

「またすぐ行くにしても、式か宴か、どっちかに出られるように、帰ってきて下さいって……武部さん、どうか、くれぐれもお願ひ致しますよ」

と、懇々頼み入れたそうだが、その効果は無であつた。

式のはじまる定刻まで、母は実父の帰京を待ちかねたが徒勞に終つた。わたしは岳父にも、また葦子にも、実父の理由のうすい不在を恥じなければならなかったが、岳父はそれを、さして氣にとめる様子もなかった。応急策として、升二郎が父代りをつとめ、母と並んで、所定の席に就いた。

そのとき、わたしはふと思つた。岳父は実父とわたしが、親子の仲でありながら、ウマが合わないのを、それとなく知つてゐるのではないか。少くとも、この結婚について、実父があまり支持してゐないことは氣がついてゐ、式にも宴にも出席しないのを、おおむね予感してゐたのではないか。然し、岳父とすれば、娘の相手はわたしであつて、実父ではない。蜜月の旅から帰つたら、小石川に小さな借家を借りてあつて、そこで新世帯をもつことになつてゐる以上、葦子は氣むつかしい実父と毎日顔を合せるわけではない。岳父は苦勞人だから、その辺のところは割切つて考え、実父の欠席を別段深刻にはとつてゐな

つたのだらう。それにしても、わたしは口が重かつたが、葦子の母に、

「どうも、ほんとうに失礼しました。父とすれば、万障さしくつて、参るところですのに……」

と、謝辭をのべた。

「でも、お役所の御用なら、仕方ございませんわ」

「お父さんも、氣持をわるくなすつていらッしやるでしょうね」

「主人は、そういうことには、あまりこだわりませんの……あんな風ですけれど、また至つて、暢氣屋でして……」

「そんならいいけれど……」

「それよりお宅のお母さまが、お氣の毒ですわ……お一人では」

たしかに、わたしの母が一番肩身のせまい思いをしたにちがいない。

然し、時が経てば、そういうことは、忘れてしまうことが多い。式がすみ、宴がはてると、母はヤレヤレと肩の荷をおろすほうが先で、ひよつとすると、却て実父のいないほうが、面倒なしにすんで、都合がよかった位に考えたのかも知れない。

また世故に長じた岳父のことだから、わたしの結婚式に、実父が欠席した話は、その後ついぞ一度も出したことがなかった。にもかかわらず、わたしの心には、このときの彼の不在がべつとり灼きついてしまつて、しかもそれが時間の経過と共に、ますますはつきりしてくるようで、わたしと実父との疎隔は、前

からもあったけれども、このときのこの一点で、抜きさしのならぬものとなった。

そして、それに反比例して、わたしは岳父のほうへ傾いていた。

わたしは一年近くも、実父に逢わなかった。実家へ行って母には逢っても、なるべく実父のいないときを狙って行き、実父の戻らぬ前に、わが家へ帰った。

葦子は二年目に一人生んだが、二、三カ月で、死んだ。それから二度、流産した。五年目にやっと満足な子供が出来、つづけてまた年児を生んだ。二人とも男の子であった。今の借家では、この子たちが大きくなると、手ぜまになると思われた。

葦子が云った。

「いっそ、お父さんの家へはいりましょうか」

「どっちの？」

「もちろん、松中よ……諸越の御両親は、まだとても……」

「でも、松中の親父が承知しないだろう」

「ホホホ……あなたのためなら、父は隠居も辞さないわ」

「まさか」

話はそれなりけり、になった。

——わたしの結婚後まもなく、実父は長年の農林省から、その外廊の或る公団の常任理事になって転出した。それで却って収入もまし、朝夕、自動車の送迎もつくようになったが、実父は依然として、借家住いに満足する風だった。葦子が諸越の両親に、隠居はとてもダメだと云ったのは、老いてますます盛ん

な実父のことをうがって云ったのである。

ところが岳父のほうには、思わざる不幸があった。葦子の母に、悪性腫瘍の発見という事態が起り、つづいてその死が襲った。岳父は六十そこそこで、男やもめになった。

「どうかしら、云ってみようかしら……家のこと」

と、葦子が云うので、

「よせよ……悪いよ……お袋の死ぬのを待っていたようで」

「そんな風には、とらないわ……あなたさえ、いやでなければ」

正直、わたしは結婚当座より、その頃になると、岳父の人間的魅力に惹かれ、はじめは葦子に惚れて夫婦になったとは云う条、今では岳父のほうに、より心が吸いつけられるといった塩梅で、それを葦子も感付いているのか、

「あなたは私より、お父さんのほうが好きなンだわ」

と云ったりした。

「普通は女房の親なんでものは、感心しないものなンだそうだが……」

惚れた女の親ほどこいだと、わたしは何人もの友達などから、聞いていた。

「だから変ってるのよ、あなたって人は……私は又、うちの父より、諸越のお父さんのほうが、ずっと偉いと思うわ。我慢強くって、奥床しくって」

「笑いたいときでも、歯を食いしばって、障子のほうを向いて、笑いを我慢する人だから……いやになるよ」

「ほんとの血をわけたお父さまなのね……あなたが決心するのなら、私もそのつもりで、引越してもいいわよ……でも、あなたは総領でしょう。諸越の御両親が、ウンと仰有るかしらね」

「それは大丈夫だ。親父もお袋も、僕には望みを断っている。どうでも好きなようにしやアがれてところだ。もともと、弟たちのほうが好きなンだから……」

葦子は半信半疑で聞いている。恐らく、そう云うわたしのひが、みが、逆に実父を怒らしていると見るに違いない。

「その代り、私が半分、父の面倒を見ることになるから、今までのように、あなたばかり云うわけにはいかなくなるわよ……多分、父は菩提のある離れ一棟を占領するでしょう。そこへ、食事をはこんだり、時々お茶を淹れて上げたり、かなり接触することが多いと思うの……大丈夫ですか」

葦子は念をついた。

「坊主どもは、どうだろう」

「みんなは、喜ぶわ。ここより何倍も広いところへ行けて……子供は広けりやアそれでいいのよ。菩提の庭を荒すのは、御法度にしろ、環境がちがうし、玄関前なら、いくさごっこ位は十分出来るでしょう」

「お祖父ちゃんは好きか」

「好きらしいわ。そう云っちゃ何ンだけど、諸越のお父さまは、どうもね」

「きらいか」

「きらいでもないけれど、馴染めないらしいわね……下の子なんぞも、可怕^{こわ}いって……」

「子供にはよくわかるンだ。親父は甘ったれを許さない。甘えていくと、ビタリ木戸をつきやアがる……あれで、子供にきられるンだ」

夫婦の間に、そんな話があつて間もなく、葦子が泊りがけで、里丈邸へ行き、そこは葦子のことだから、先の先の細部にわたつて、打合せをすました上、

「お父さんったら、そいつは渡りに舟だつて……但し、諸越の御両親に申訳がないから、そちらが完全諒解して下さるという含みに於て賛成するッて——」

「では、決つたようなものだ」

とわたしは云つた。実父には母から取次いで貰うことにした。このとき実父は、母に、

「あいつのすることは、いつも事後承諾ばかりだ。したいようにするがいい」

と、吐いて棄てるように云つたという。

要するに、実父から見れば、岳父の一生は、軟派の一生であり、そこにわたしが共鳴しているという風に見えているらしい。軟派と硬派とは、とうてい相容れ、相許すことの出来ない人生の二つの潮流である。

が、当時のわたしとしては、硬派の実父に対立する意味での軟派であつて、軟派の何ンたるを正解するには未だしであつた。こういうプロセスがあつて、わたしは家族ぐるみ、岳父の家